

talk! talk! talk! 作曲家・船村徹さん



作曲家 船村徹さん

「王将」「矢切りの渡し」など、数々の名曲を世に送り出してきた作曲家・船村徹さん。歌で日本人を励まし、勇気づけてきた船村さんにとってのかけがえのない長年の趣味がカメラである。自他ともに認める大のカメラ好きで、所有するカメラは130台ほど。新製品のチェックもかかさなそう。 「これを買うために仕事をしているようなもの」とカメラを手に目を輝かせながら語る船村さん。今回は、ひと言ひと言にカメラへの愛情が滲む船村さんのカメラ談義をたっぷりとお伝えします。

プロフィール

ふなむら・とおる。本名、福田博郎（ひろお）。1932年、栃木県塩谷郡船生（ふにゅう）村（現・塩谷町）生まれ。17歳で上京し、東洋音楽学校（現・東京音楽大学）ピアノ科に通う。同校で知り合った盟友、高野公男氏の詩に感化され、22歳から作曲活動を展開する。その後、苦しい下積み時代を過ごし、1955年11月にキングレコードから発売された「別れの本杉」（春日八郎）が大ヒットとなり世に出る。翌1956年、高野氏と共にコロムビアレコードの専属となるが、高野氏は肺結核が悪化し他界。1961年、「王将」（村田英雄）で戦後初の「ミリオンセラー」という金字塔を確立、その年のレコード大賞特別賞受賞。これまでに、「哀愁波止場」「みだれ髪」（美空ひばり）「兄弟船」（鳥羽一郎）「矢切りの渡し」（細川たかし、ちあきなおみ）「風雪ながれ旅」「北の大地」（北島三郎）「傘人中」（五木ひろし）など、数多くのヒット作品を世に送り出している。現在、社団法人日本作曲家協会会長、日本レコード大賞制定委員長、栃木県警察本部顧問、栃木女子刑務所篤志面接員、横綱審議委員会委員など、作曲はもとより、講演、審査員と多方面で活躍中である。1995年、紫綬褒章受賞。2003年、旭日中綬章受賞。1978年にフリー作曲家となってから、無名時代に苦楽を共にした親友高野氏への思いを胸に歌作りの原点を模索する「演歌巡礼」の旅を開始。「日本人が日本人であり続ける限り、演歌や日本のメロディーが息絶えることはない」という船村氏は、今年で作曲生活52年目を迎えた。現在も全国各地に自ら赴き日本人の心を歌う「演歌巡礼」を続けている。

初めて手にしたニコンカメラは 世界を共に歩いたFフォトミック

カメラを持ち始めたのはいつごろからですか？

高校生のころから本腰を入れてやってきました。上京して大学に入ったのが昭和24年ですから、その前だとちょうど戦後ぐらいですね。そのころはまだ、日本のカメラ産業はよちよち歩きでしたし、カメラは貴重品でした。まずフィルムが手に入らない、そういう時代です。それでもカメラをやっていたんですね。



当時、カメラを持っているということは、大変珍しかったんでしょうね。

あまりなかったでしょうね。家に、ドイツ製のスプリングカメラ（※注）がありまして、それを使っていました。当時から生意気でしたからね。食べるものもなく痩せっぽちなのに、スイス製の時計をしてたり、そんなヤツだったんです（笑）。でもね、実際に撮るのが楽しかったんですよ。そのころはモノクロですから現像も自分でやっていたし、そういうものも含めてカメラ全体が好きだったんですね。

撮影技術はどうやって身につけたのですか？

本をいろいろ買ったりして自分で勉強しましたね。それからね、これくらいまで（手にしたFを指して）のカメラだと、パシャというシャッター音でシャッタースピードが何秒かわかるんです。音を扱う仕事をしていますからね、これは職業柄なんだろうね。だから夜でも撮っていましたよ。うんと練習していましたから、開放で10秒ぐらい、手持ちでもぶれないで撮れたんですよ。

ニコンのカメラも長く使っているそうですね。

20代の終わりごろ、2年ほどヨーロッパで仕事をしていたんですが、その時に持っていたのがFフォトミックなんです。そのころからニコンを使っています。このFはね、僕と一緒に世界を歩いたカメラなんです。あの時代のヨーロッパの農村の風景というのは、青春の思い出と共に印象深く残っています。

現在のお気に入りの機種というは？

最近、今日持ってきたD1X、F5も使っていますし、D100は軽いからちょこっと旅に出るときにいいので、それもよく使っています。でもね、不思議なんです、このF5などは最近の他のカメラと比べると重いんですね。ところが写真を撮るときに構えると、きっちりと安定感のある重量になっているんですよ。軽ければいいというものでもないんだと思いますよ。弱い相撲取りみたいなものでね、下半身が決まらないんです。これくらいの重量があるほうが僕は好きですね。

※注 スプリングカメラボタンを押すと、前蓋の中に折り畳まれて収納されていた蛇腹とレンズ部分が表スプリング（バネ）の力で自動起立するカメラのこと。

新製品は買わずにはいられない「カメラシンドローム!？」

カメラをたくさんお持ちだとおうかがいしたのですが。

今はどれくらいかな。たぶん、カメラ本体だけで130台ぐらいはあるんじゃないかな。カメラでいっぱいになってしまっただけで、それに付随してレンズなどもたまると。だからね、この前、家一軒建てましたよ。

え！ 家を？

例えば、D1を買ってね、そうしたらD1Xがすぐに出て、ああ、画素数がこんなに上がっているじゃないかって思っただけで買っただけ。そうしたら今度はD100が出ましたよ。これも一応おさえておかないとっていうことで買っちゃうんです。そうやってどんどん増えちゃうんですよ。新しいカメラが出るとやっぱり気になるんです。次のはどんなだろうって。出たらね、買わなきゃしょうがないんです。

「しょうがない」んですね（笑）。

きっとカメラ病、カメラシンドローム、そういうものにかかっているんですよ。新しいカメラやレンズが出ると、こう体がムガムガッと（笑）してくるんです。それからね、注文してから手もとに届くまでがものすごく緊張するとか、興奮するとか、まだ来ないかなあ、まだ来ないかなあって思って、それで仕事が手につかなくなったりするんです。ところがね、物が届いてその箱を見るでしょ、その瞬間にガクーンと。その後はもう冷静になっているんですよ。そういう感覚は毎回非常に感じますね。

でも、手に入ってからでも、何度も出しては眺めてしまうなんてことはありませんか？

ありますね。仕事などで疲れると眺めるんです。私はレンズが好きなのですから、レンズを手にとって眺めていると気持ちが落ち着くんですよ。今は機械で作るんでしょうけれど昔は手で磨いていたんですよ。特にそのころ生産されたレンズを見てるとね、ひとつひとつ丁寧に磨いている職人さんのクラフトマンシップみたいなものが伝わってきて、「俺もいいものつくらなきゃなあ」と思うんですよ。それでまた仕事ができるんです。かなりオタクな世界ですかね（笑）。同じ物を生み出す人として、何か人ごとではないように感じるんでしょうね。

そうそう。レンズはそういう対象になりましたね。でもレンズもそうだけれど、カメラもすごい技術だと思えますよ。このあいだ復刻したS3だって、来るまでにずいぶん時間がかかるなあと思ってたけれど、設計図を起こしてビス一本一本から作ったんでしょう。そう考えると時間がかかって当然だし、あの値段でも安いもんですよ。



長期に渡り撮り続けてきた写真は 自分の歩んできた人生の日記

いつもどのようなものを撮影されているのですか？

風景がほとんどですね。たまに気が向いたり頼まれたりしますと自分のレコードのジャケットも撮ったりしますよ。歌の心象風景を表しているようなものをね。この間、ビートたけしさんと出したCDのジャケットは私が撮った線路の写真を使ったんです。ちょっと恥ずかしいですね（笑）。

人物を撮ることはありますか？

娘や弟子を撮ったりすることはあるんですけどね、ほとんど人は撮りませんね。生まれが栃木の日光のほうなので、手近な所にたくさん大自然がありました。だから昔から風景ばかり撮っていたんですよ。今も仕事場がそちにありますから、四季折々の日光、中禅寺湖辺りなどよく撮ります。それから僕は25、6年前ぐらいから「演歌巡礼」というのをやっているんです。東京だけじゃなくて歌を作った歌うのではなく、日本全国方々まわってまわって歩いて、地元の人たちと触れあって歌を歌う。そこでその土地の写真を撮っています。

写真を撮るためにどこかに出かけられることはあるのですか？

撮影旅行にも行きますよ。海外だとフィジー、パラオ、カリマンタン、アラスカ.....比較的僻地のような所が好きなんです。アラスカには真冬に撮影に行ったり、山に行っても人が入らないような所に分け入って撮ったりね。

あの、50歳になるって男にとってはショックなんです。40歳はまだ可能性がある、60歳になってしまってもう開き直っちゃうんですけど、50歳っていうのはね、あと10年で還暦ですし、なんともいえない生々しさがあるんですよ。それで僕は50歳のときに何をしたらかという、ひとりで10日間ほどカメラを持って北海道に行ったんです。そのときも、熊が出るころだから危ないよって言われるような山の奥まで入って行って、写真を撮りましたよ。

50歳記念の思い出の写真ですね。

シャッターを押すたびにその音が「50だぞ、50だぞ」って（笑）、そう聞こえた気がしてね。旅の最後には花咲ガニをトランクいっぱいになるぐらい買って、ホテルに帯広の友人をたくさん呼んでカニパーティーをしました。自棄ガニです（笑）。写真を見るとそういったことを思い出しますね。写真が記録としてちゃんと残っているんですよ。そういうふう撮ってきたものっていうのは、ものすごく大事ですよ。

ご自分の手で撮り続けてきた自分自身の記録ですね。

高校からこの歳までずっとカメラを手放さずに、いろいろのものを写してきましたからね。写真が自分の歩んできた人生の日記のようになってきている気がするんです。それから職業柄いつも周りに人がいますからね。そうやって節目にカメラを構えるというのは、そうすることでカメラとふたりつきりになるというか、きっと自分と向き合う時間を作っているんだと思います。



船村徹作曲生活
50周年記念「追憶」
(2001年・テイチクレコード/
シングル・シングル
カセット共に1,048円+税)
作曲生活50周年を記念し、
ビートたけし氏自作詩に曲をつけ、
船村先生自らが歌っている。
奇才二人がタッグを組み、
話題となった名曲。



撮影・船村徹さん



撮影・船村徹さん

空想の世界を広げることが 歌作りのアイデアになる

カメラの一番のおもしろさはどこだと思われますか？

目の前の自然の中から好きな一点をピックアップするおもしろさ、そしてそれが宗谷岬だろが富士山だろが、写真にすれば我が家のお茶の間まで持ち運んで来られちゃうでしょ。

写真であればいつでも好きなときに見ることが出来ますね。

そう、四季折々の風景も、季節に関係なくいつでも眺められる。それから写真はね、仕事にも

役立つんですよ。歌を作るというのはね、空想や幻想の世界を思い描くということが非常にプラスになるんです。



撮影・船村徹さん

たとえばきれいな風景写真があるとすると、そこにこんな生い立ちでこんな状況の女性が立っている。さらにその女性が船村徹を待っていてくれる人であったらどうかな、なんていうふうだね、一枚の写真から、どんどん空想の世界ができてくるといっていいんじゃないかなあって湧いてくるんです。

写真があることで歌のイメージが湧きやすくなるんですね。

そうなんです。自分で撮ったものであれば、思い入れも強くなりますしね。そこで作りあげた空想の世界から、こういう歌を作ったらいんじゃないかなあって湧いてくるんです。

レンズを眺めて奮起したり写真からアイデアを得たり、仕事をする上でもカメラは欠かせないものなんです。

趣味は趣味なんです、結局はどこかで仕事とつながっているんだと思います。でも、写真集を作りませんか？ とよく言われるんですが、不思議なものでね、それだけはこう（両手で守るようなポーズ）したくなくちゃなんです。これは自分の趣味音楽で、

僕だけの大事なもの、というかね。
写真を本当の“仕事”にしてしまいたくない。



撮影・船村徹さん

そうそう。写真集にしちゃうとせっかく大事に守っていたものが大衆の面前にさらされてしまうから、それだけは嫌でね、ずっとこうして守って来たんです。

では今回は、その大事にしていた部分を少しだけ見せていただいているんですね。もしかしたらこのなかの写真からインスピレーションを得て生まれた曲もあるかもしれませんね。

ええ、ありますよ。たぶん（笑）



撮影・船村徹さん

作曲生活52年を 支え続けてくれたカメラ

僕は今年で作曲生活52年になったそうです。嫌になっちゃいますね（笑）。

52年というのは、ご自身では長いと感じますか？

そうですね。ここまでやって来られたのは、大好きなお酒と、それからやっぱりカメラのおかげでしょうね。

良いメロディーもそういった部分から生まれるのでしょうかね。

メロディーばかり考えている作曲家は下手ですよ。テーマだったり空想だったり、何かを考えているうちに自然と出てきたものを曲にすればいいんです。それを音符ばかり追いかけているうちはたいしたものがないんです。

でも、そうすんなりとメロディーは生まれるものですか？

インスピレーション、それが出てこないうちはいくら焦ってもしょうがないでしょ。出てくるまで待たないんです。そのかわりインスピレーションが浮かびやすいような体勢を常に整えておかないとダメですよ。私の場合はそのための応援団としてカメラとお酒がある。

今、演歌は日本の音楽業界の中で元気がないように捉えられがちですよ。

とにかく今はテレビ、映像の時代ですよ。若い人のポップスやロックなどは見た目も派手ですし、全国区のテレビに多く露出していますからそう思われがちですが、そんなことはないんですよ。あまり露出されていないだけで、今日も明日も、大人が歌っているのは演歌。圧倒的に演歌を歌っている人の方が多いんです。

日本の歌として、演歌はこれからもずっと歌われてゆくものだと。

もちろん。演歌は日本人の血液、DNAだと思うんです。子供のころはアイドルを見て、学生になってロックや洋楽などを聞いて、結婚して子供ができて大きくなって、やはり最後には演歌を聞くのではないのでしょうか。

なるほど。ではこれからも、心強い応援団と共に、日本人の心に触れる演歌を作り続けてください。

はい、命ある限り。

カメラも？

ええ、命ある限り増え続けてゆくでしょうね（笑）。



撮影・船村徹さん

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.